子どもシェルターモモ
News Letter
No.29
2026年1月1日

発　行
特定非営利活動法人子どもシェルターモモ
〒700-0838 岡山市北区京町11−8
電話086-206-2423　FAX086-237-0634

CONTENTS

・巻頭言……1
・特集 座談会　2〜3
社会的養護施設の現状と展望
・インタビュー「人」……4
・「モモの家」通信……5
・「あてんぽ」通信……5〜6
・「学南ホーム」通信……6〜7
・「アフターケア」通信……7
・事務局だより……8

表紙絵の言葉　内村　暁
シャボン・タウンへようこそ
おなかのなかの
うれしいことも
かなしいことも
ぜんぶまとめてとばしたら
どこまでだっていけそうだ
（シャボン玉は いつだって
うれしいいろにも
かなしいいろにも
みえますね）

巻　頭　言

NPO法人子どもシェルターモモ　理事長　**井上 雅雄**

感謝の心

「感謝の心」は、パナソニック創業者の松下幸之助さんの言葉です。通勤中や入浴中にYouTubeで松下幸之助さんの言葉を聞くのがマイブームになっています。

私は、大学卒業後、松下電器産業株式会社に約5年間勤務しました。当時、PHP研究所発行の書籍が社員に配布されていましたが、私は、読み飛ばしていました。YouTubeを実践して、感じていることをお伝えしたいと思います。参考になれば幸いです。

私は、YouTubeに従い、当然のこととして見過ごしていることや、些細なことに感謝することから始めました。まず、朝の習慣を実行することにしました。朝、目覚めたら、布団の中で深呼吸し、洗面所で口を濯ぎ、鏡に向かって「今日も元気だ、ありがとう。」と感謝の言葉を発しています。

このおかげか、私自身の行動や私の周りに変化のきざしを感じ始めています。

私は、自分にはどうしようもないことに悩まず、自分にできることを誠実に行い、周りを信頼して任せ、感謝するように心がけています。私自身の心が軽くなり、周りの雰囲気も良くなりつつあると感じています。

私の人生を振り返ると、家族・組織の仲間・契約先・支援いただいている方・関係者など多くの皆様のおかげで今があります。私を含む関係の皆様が健やかで共にあることが、ありがたいことと感謝できるようになりつつあります。

人は、自分を変えることはできますが、人を変えることはできません。しかし、人が変わることを信じて寄り添い続けることはできます。ある弁護士から「人は変わる。信じろ」と言われた言葉を実感できることがありました。私は、本人を含む多数の関係者と共に喜び、感謝しています。

今も悩み苦しみ続けている子どもたちがいます。私たちは、諦めないで寄り添い、応援し続けて、少しの変化に感謝することを心がけて活動したいと考えています。

特集

座談会「社会的養護施設の現状と展望」

「社会的養護施設の現状と展望」をテーマに岡山県内の自立援助ホーム、児童養護施設、乳児院の施設長３人が話し合いました。

子どもたちの暮らし、支援の在り方、今後の取り組みが示されました。

◆参加者（50音順、敬称略）
- NPO法人子どもシェルターモモ・自立援助ホーム「あてんぽ」ホーム長 岡嶋安起
- 社会福祉法人みその児童福祉会・児童養護施設「岡山聖園子供の家」園長 則武直美
- 社会福祉法人旭川荘・乳児院「旭川乳児院」院長 三宅めぐみ

＜進行＞江草明彦（子どもシェルターモモ理事）

右から三宅、岡嶋、則武の各氏と進行役の江草

◆子どもたちの暮らしは

－則武さんは岡山県児童養護施設等協議会の会長でもあります。どのような施設が加入し、活動しているのですか。

則武　県内の11児童養護施設のほか乳児院、児童心理治療施設、児童自立支援施設の各1施設の計14施設がメンバーです。テーマ別に5部会があり、職員研修でスキルアップを図ったり、高校生対象の消費者セミナーや小中学生対象のスポーツ大会を実施したりして、施設間の交流を深めています。

－県内の児童養護施設の数と所在地、利用者数は。

則武　岡山市に5カ所、津山市2カ所、倉敷、笠岡、赤磐市、吉備中央町に各1カ所あり、約300人が生活しています。小規模で暮らすスタイルが進んでおり、敷地外に家を借りるなどして暮らす地域小規模施設も定着しつつあります。

岡山聖園子供の家を運営するみその児童福祉会は、岡山市以外に名古屋、米子（鳥取）、高知、廿日市（広島）の各市で展開する児童養護施設の大半が1ユニット6人で暮らしています。各ユニットの台所で作り、それぞれ食卓で食事をするスタイルです。厨房や大人数が集まる食堂は見られなくなりました。施設整備が終わっていないところもユニットで食事をするスタイルです。地域小規模施設も多く、地域で暮らし成長しています。

－旭川乳児院は県内唯一の乳児院で、旭川荘創設時の3施設の一つですね。乳児院の役割や理念を教えてください。

三宅　その子がその子らしく生き生きと育つ、という考えで取り組んでいます。子どもの保護と養育、保護者、里親、地域の子育て支援という役割を担っています。0歳から2歳を養育するとされていますが、家庭での引き取りが難しい場合などはおおむね３歳ぐらいまで延長することがあります。

全国的に虐待や虐待の疑い、親が病気などで養育困難であることを理由に入所しています。同様の理由で一時保護（児童福祉法に基づき児童相談所が虐待などを受けた子どもを家庭から引き離す措置。一時保護所のほか児童相談所から委託を受けた施設が受け入れている）の数が増えています。スタッフは看護師、保育士、栄養士、調理師等です。

－自立援助ホームはどのような施設で、どのような人が利用しているのでしょう。

岡嶋　義務教育終了後に何らかの理由で家庭にいられなかったり、児童養護施設などを退所後の原則15～20歳が生活しています。子どもシェルターモモは男女別に計2ホームあり、定員は各6人です。主に児童相談所を通した利用になります。

一つの家（ホーム）でスタッフと共に生活し、ホームから通学、通勤できます。「あてんぽ」は女性専用のホームで現在、16～19歳が暮らしています。利用期間の制限はありませんが、自立を促すため半年から1年半を目安にしています。厳しいルールを定めていません。学校に通ったり、アルバイトに行くなどして午後6時以降に帰ってきます。食事や入浴後はそれぞれの部屋で過ごしています。

◆どのような支援をしていますか

－社会的養護の分野では、子どもたちの意見を聴き、子ども自身が声を上げることをサポートして権利を守る「子どもアドボカシー」が取り組まれています。県内の児童養護施設の現状は。

則武　各施設で取り組んでいます。岡山聖園子供の家では子ども会を開いて意見を出し合ったり、意見箱に投書したりする仕組みがあります。食事に関する給食部会に子どもたちが出席して要望を出してもらってもいます。

2025年9月、岡山県児童養護施設等協議会が「子どもの声から始める委員会」を立ち上げました。県内施設に入所する子どものサポートに児童養護施設や児童相談所、関係自治体が、共有した子どもの声に対し適切な支援や要望の実現につなげることが狙いです。

虐待を理由に入所するケースが多く、自分の意見

を表現できにくく、気持ちを読みづらいことがあります。子どもたちの気持ちをどのように引き出し、支援につなげていくかが課題となっています。

委員会は各施設、県内4児童相談所、県、岡山市の担当部局のほか、子どもの権利擁護に詳しい弁護士を含めた約20個人・団体で構成しています。年2、3回程度の会合を開き、グループワークなどで各施設での具体的な事例を検討し、対応を話し合っていきます。

－児童養護施設の退所後、どのような支援をしていますか。

則武　自立支援担当職員を中心として、高校生になったころから卒業後の進路について話し合うようにしています。岡山聖園子供の家の大学等への進学率は27％です。学費がネックとなるのですが、みその児童福祉会では学校法人順正学園と連携協力協定を結び、順正学園が運営する吉備国際大学などに学費免除で入学が可能です。独自に設けた給付型「みその奨学金（月5万円）」や他の奨学金を併用し、進学の機会を広げています。25年春に吉備国際大学を卒業した子は成績優秀で、卒業生代表となり、東京に就職しました。進学、就職を問わず退所後に一人暮らしをする場合、住居確保が課題ですが、支援をしてくださる不動産会社にお願いすることもあります。

－旭川乳児院では子どもたちへの支援で心掛けていることは何でしょう。

三宅　「愛着（アタッチメント）」の形成が難しいケースがあります。目が合わない、異状な泣き方をする、抱っこしようとすると反り返る、表情が乏しい、といったことが見られます。担当職員を中心に愛着の関係を築くことに努めています。

旭川乳児院はユニット制（1ユニット5人）で、他の職員とも連携するようにしています。ユニットごとの担当職員との関わりの中で、子どもたちが受け止めてくれる大人がいることを感じ、信頼や安心感が育めるように努めています。また、旭川荘は医療・福祉の融合が特徴で身近に医師がいます。同じ敷地内の療育・医療センターで受診することが可能ですし、月1回の健診もお願いしています。

－旭川乳児院は子育て短期支援事業（ショートステイ）をしています。0～2歳未満の保護者が病気やけがなど理由に乳児院に預けることができる事業です。全国乳児院協議会の調査では、24年度は全国で9732ケースあり23年度比で2970ケース増えています。148乳児院のうち専従職員がいるのは25しかないとの結果でした。

三宅　ショートステイは増えています。24年は59人で、地域の子育て支援に対応しています。これとは別に一時保護の受け入れが25年は10月末までに27件ありました。

－自立援助ホームは「当たり前の生活」「主体性の保障」「退去者支援」を大切にしていると聞きます。あてんぽの自立に向けた取り組みは。

岡嶋　その子のおおよそ80年の人生の中で私たちが接するのは1、2年です。短い期間で何ができるかを考えています。過酷な体験を経て痛みに痛み、生きる力がないのではと思うケースがあります。持ち金を使い果たしてしまうこともあります。私たちは「1日1日を生きてほしい」「困ったと言える人と出会えるようにしてほしい」という思いを込めて接しています。

こんなエピソードがあります。退所した20代の女性がある日、自分の子どもを連れて訪ねてきてくれたのです。在所中はいろいろなトラブルがありました。けれど彼女は「あのころ、あんなに良くしてくれた。もっと（職員に）優しくすればよかった」と振り返り、「あのころは、大人に仕返しをしなければと思い、（職員に）辛く当たっていた…悪いことしたなあ」と話しました。

◆今後の取り組みは

－児童養護施設、乳児院、自立援助ホームが取り組もうとしていることをお話しください。

則武　児童養護施設は施設を利用する子どもだけではなく、地域の子育て支援の拠点の役割があります。地域で困っている家庭、子どもたち、卒園生に積極的に支援するアウトリーチが重要です。（児童養護施設などに併設する）児童家庭支援センター、里親支援センターもそうした役割を担っています。

三宅　里親制度を普及、充実させるフォスタリング事業に力を入れています。現在、里親登録を促すリクルートや研修を担っています。乳児院では家庭的な環境を心がけていますが、やはり里親家庭で育つ子どもの様子を聞いたり、穏やかな表情を見たりすると、社会の理解が広がり、幸せに暮らせる世の中になってほしいと感じています。

岡嶋　自立援助ホームは全国に約300カ所以上あり、県内でも少しずつ増えています。子どもたちはさまざまな課題があります。今回の皆さんのお話を聞き、乳児院や児童養護施設などとつながることで、支援の選択の幅が広がると思いました。ぜひ、連携したいです。

－支援の必要な子どもや子育て家庭の課題は複合的でさまざまな分野に関係しています。社会的養護の現場こそ縦割りではなく、助け合う必要があることを再認識しました。　（文責：江草明彦）

インタビュー人

岡山市　発達障碍者支援センターひかりんく
子ども総合相談所 医療専門監・精神科医

壷内 昌子 さん

精神科医としてモモの子どもたちに関わっていただき、また、ボランティア養成講座でも「発達障害」について講師を引き受けていただいております。現在の子どもたちに向き合う想いを、お伺いしました。

岡山市に生まれて、育ち、現在も岡山市で生活をしています。今でもそうなのですが、子ども時代から優しい人たちに囲まれて育っていたように思います。今の職業を選択した理由は明確なものは思い出せません。勝手な印象ですが、そんな精神科医は案外と多いです。

大学を卒業後、精神病院で10年間勤務しました。その経験を経て、先輩医師の導きもあり、子どもの発達の専門医療機関である旭川荘療育・医療センターで児童精神科医としての研修を受けました。その後医療法人豊仁会まな星クリニックでの勤務を経て、現在は岡山市の医療専門監として、岡山市発達障害者支援センターとこども総合相談所（児相）に勤めています。児童養護施設などに入所している子どもたちに精神科医として関わっています。週1回の精神科医療センターの外来では、そのような子どもたちや施設から離れて大人になった人の診療もしています。

子どもの時間を取り戻すこと

子どもの発達障害と虐待は本来別の現象なのですが、発達障害を持たれたお子さんの親が発達障害の傾向が強く、育児に困難を感じても柔軟な対応ができない時に、虐待が起こることがあります。発達障害への早期介入は、子どもの発達障害の診断ではなく、早くそれぞれの子どもに合った療育支援が得られるためでもあります。子どもの世話をする親が抱える育児の難しさを、少しでも早く、軽くするための関わり方を診察や療育の時間の中で習得していただくことが虐待防止になると考えているからです。

しかし残念ながら、親から虐待を受け心に大きな傷を受けた子どもは少なくありません。そんな子どもたち（と成人になった子どもたち）と接する時、私は一切否定せず、子どもが話すことは精一杯肯定する対応をします。世話をされることもそうですが、そのままを受け入れられることが子どもにとって大切な「子どもの時間」だと思います。それはモモのキャッチコピーである、「『子どもの時間』をうばってしまったのは、おとなです。返してあげられるのも、私たち」と思うからです。奪われたものを過小評価してしまい、何も対処せず社会に出たら、小さな躓きも「できるはずのことでも頑張れない。自己との約束が守れない。自分が悪い。」とトラウマの症状が出て孤立を生んでしまいます。しかし、現在の制度では子どもが18歳になると支援が途切れてしまいがちです。子ども時代に受けるべき愛情を受けていないまま、家庭であれば当たり前のことを経験しないまま、支援も失い、社会に出て年齢相応のことを期待される社会に「厳しくしつけされ」トラウマにより孤立を生みだします。大人が関わらなくなった後がもっと大変、どう生きていくのかと心配になっていた時、子どもシェルターモモの「アフターケア事業所en」の存在を知り救われました。私が長年診察してきた子どもが今でも「en」でお世話になっています。どんなに子どもから無理難題を言ってきても「しょうがないな」と甘やかしてくださっています。これから、時を経て、甘やかし続けられない事情が起きたときは、きっと子どもが「しょうがないな」と重い腰を上げて、自分ですることを少し増やして、なんとかその人らしく暮らしていってくれるのだろうと思っています。

安心できる絆と、一貫性を大事にして

令和2年度から、岡山県子どもの心の診療ネットワークという事業のなかで、子どもの心にかかわる専門職（医師、心理職）が、親子相互交流療法（PCIT）、子どもと大人の絆を深めるプログラム（CARE）というふたつのプログラムを、ともに学び、セラピーやワークショップを実践しています。医療機関に受診する親子だけでなく、里親さんや施設の職員に向けても行っています。トラウマ体験のある子どもやその親にも有効な治療であり子どもへのかかわり方のプログラムです。とても基本的な内容ですが、親子を支援する専門職の中でも再確認して取り組んでいます。トラウマのある子どもへの対応で疲弊する前に、学ぶ機会を届けたいです。

（文責：Y・M／インタビュー：H・R）

子どもシェルター

「モモの家」通信

3月にモモに入職し、早9か月が過ぎようとしています。春、夏、秋、そして冬の訪れも感じ始めた今日この頃。日々楽しく支援をさせていただいています。今回、モモの家の子どもたちの様子をお伝えできたらと思います。

モモの家に来る子どもたちの中には、おやつ作りや工作の経験がほとんどなく、モモの家で初めてを経験する子も多々います。

絵が得意な子どもの作ったプラパン

初めてには失敗もつきもの、もちろん失敗もあります。プリンを作れば牛乳を入れ忘れて甘い卵焼きもどきができたこともありますし、オムレットを作ればカッチカチのせんべいもどきが出来上がったこともあります。

しかしながら私はそれもいい経験になると思っています。成功だけがすべてではなく、失敗も当たり前にある。これが人生なのです。失敗しない方法を伝えていく事も必要なのかもしれませんが、それよりも失敗しても大丈夫なんだ、怒られないんだ。という安心感をモモの家で少しでも体験してもらえたら、と感じています。

子どもと一緒に作ったクッキー

“失敗しても大丈夫”という安心感は次にチャレンジする原動力にもなります。

甘い卵焼きもどきを作った子は何回もチャレンジして他の子も絶賛するほどのプリン名人になりましたし、せんべいもどきを作った子も、次に作った時にはふわふわのオムレットを完成させることができました。

ある日のこと、一緒にお菓子作りをしている最中に、とある子が言いました。

「もしスマホがあったら、お菓子を作ろうなんて思わなかったし、こうやってAさんと話をしながらお菓子を作る楽しさもわからなかったんだろうなぁ。」

彼女が、スマホでは味わえない人の温かさを感じてくれているのだと感じた瞬間でした。

モモの家で過ごせる時間は他の施設に比べて短いものにはなりますが、余暇をはじめ職員との会話、日常の食事、何気ない時間など、少しでもホッと安心し安全に過ごすことができる…そんなあたたかさを子どもたちに感じてもらえるよう、今後も支援に励みたいと思う1年目の冬でした。

（文責：A・M）

子どもと一緒に作ったハリネズミ揚げ饅頭

自立援助ホーム

「あてんぽ」通信

あてんぽでは大切にしようと心がけていることに、季節行事を盛り込むことがあります。

直近では「ハロウィン」でした。昭和生まれには、この行事をお祝いすることが稀でしたが、近年はニュースなどでも取り上げられ、若い世代には当たり前のお祭りです。年齢の若い職員さんが、早々に飾り付けしてくれました。昭和生まれの職員も、負けじと折り紙にお菓子を仕込んで壁にガーランドをこさえていました。入所者たちはその様子に食いつきました。飾り付を見ながら「なんだこの程度の飾りなのか」と軽口叩く子もいれば「お菓子は食べてもいいの？」と、いつ食べてもいいよと言われるの

配ったお菓子

をまだかまだかと待ちわびていたりと、大変微笑ましかったです。31日には、袋にたくさん？お菓子を入れて配ると、うれしそうにどの子も受け取りました。職員間も子どもにも世代が違いますが、それぞれいるからこその楽しみ方だったかなと思いました。

先日の自立援助ホーム協議会の研修会で村木厚子さんが、子ども貧困のことを説明しても「今の日本にはいないはず」と信じてもらえないが、皆が貧困を見ようとしてくれるきっかけになるというお話をしてくださいました。シングル家庭の姉妹がいて、保健室登校した日に保健室の先生に朝ごはんも食べてないだろうからと、リンゴをむいてもらって食べた時、妹が「美味しい」と喜んだそうです。姉も「私も先生にむいてもらって初めてリンゴ食べた時衝撃だった。果汁も出てコリコリと歯触りも良くて！妹に食べさせたかったの」と言ったそうです。リンゴもいまや100円程では手に入りません。100円程あるならお腹を満たすためには食パンを買うのです。果物はぜいたく品となってしまった。果物を食べる経験のない子も入所してくる時代が来ているのだと思うと、食卓に果物を置くことも意識した方がよいのかもしれません。この文章を読んでなるほどと思ってくださった方は、あてんぽに是非、食べたことがないようなおいしい果物やお菓子を届けてくださいね。（笑）　（文責：岡嶋）

ハロウィンの食事

ハロウィン仕様の飾りつけ

自立援助ホーム

「学南ホーム」通信

令和のビーリーズブートキャンプ

学南ホームには現在6名の個性豊かな子どもたちが在籍しています。

6人全員仲良し！というわけではないですが、良い距離感を保ちつつ共同生活を送っているなという印象です。ある子は、職員が忙しそうにしているのをみたら率先して「夜ご飯作ろうか？」と声をかけてくれます。その言葉掛けに職員はかなり助けられています。本当に感謝です。

例年通り今年の夏もイベント満載で活動をしました。毎年恒例（？）になりつつあるBBQは勿論、今年の夏は県北に流しそうめんを食べるためにお出かけもしました。平日の昼間に行ったにも関わらず、大行列で3時間待ち。“そうめんを食べるのに３時間？！”と思われるかもしれませんが、意地と根性で雨の中、待ち続けました。子どもたちも「ここまで来たら絶対食べる」と確固たる決意を示し、そうめんに在りつけたときには「耐えたかいがあった」と言い、満足そうでした。長い時間並んで食べたそうめんは今までの人生で１番美味しかったに違いありません。いや、もう絶対１番であってほしいです。

流しそうめん～夏～

普段の生活ではなかなか口に出せないようなことでもイベントを通じてなら子どもたちは色々と話をしてくれます。過去のことや今思っていることなど。“これは聞けて良かったなぁ”と思うことばかりなので、子どもとの距離を縮めるためのツールとして、無理ない範囲でイベントを続けていけたらといいなと思っています。

2人は大の仲良し

それとこの半年を振り返って欠かせないことがもう１つ。OBの子たちへの支援です。話題が尽きません。一難去ってまた一難の繰り返し。ホームを退所したからといって終わりではなく、むしろ退所した後の方が大変だなと思わされています。アフターケアの重要性と難しさを感じる日々です。それでも困ったときはいつでも相談ができる体制を整えて、これからも支えていこうと思います。

といったような感じで、学南ホーム年中無休で営業中でございます。変わらず笑いが絶えないホーム作りを頑張っていきますので、応援のほどよろしくお願いします。それではまた。　（文責：紙谷）

アフターケア

アフターケア「en」通信

この原稿を書いている数日前、アフターケア事業所enとして今年度の一大イベントとなる「講演会・シンポジウム」を無事実施することができました。大分で当事者活動をしていたケアリーバー<社会的養護経験者>お二人（現在は大分を離れ別々の地でご活躍中）が講師で、「ケアリーバーが直面する困難そして希望について」と題した講演と、岡山市で生活する施設退所後と入所中の若者と施設・児童相談所関係の大人が参加するシンポジウム、更に余韻を共有する懇親会も併せた盛りだくさんの3本立て。社会福祉法人中央共同募金が運営しているソフトバンク・チャリティスマイル第9回「安心して巣立とう」応援助成金を申請したのが昨年の冬でしたので、振り返ってみるとほぼ1年にわたるプロジェクトを何とか走り抜け、スタッフ一同ホッとしているところです。

講演講師

字数の制限もあり詳細な報告は難しいですが、講演では講師の方々の経験に基づいたエピソードや、「自立支援」という表題には人生の伴走者に出会ったり、繋いでいくことの意味付けが必要といった指摘、また「支援する側とされる側のズレ」の気付きから辿り着いた「若者とともに行動を」「若者に平等な機会を」「若者に心からの理解を」の3本柱とする『若者包摂社会』への提言に触れ、素直に全てに心打たれました。シンポジウムでは「困難」と「希望」について、それぞれの立場での思いを重ね合い、最後に懇親会では講師の方への質問コーナーで理解を深める事ができ、有意義な会となりました。

シンポジウムの様子

懇親会の様子

今回は若者と大人が一堂に会する集まりだったので、以前に入っていた児童養護施設の職員に大きく成長した現在の姿をお披露目するような場面も見受けられ、我々としてもほっこりさせて頂きました。

最後になりますが、本事業の助成を頂いたソフトバンクとチャリティスマイルに参加されている皆さんには感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。個人的にソフトバンクユーザーでありながらチャリティスマイルについて全くの無知だったのですが、この機会に参加（登録）することにしました。興味のある方は是非！　（文責：古市）

ソフトバンク・チャリティスマイル

https://www.softbank.jp/corp/sustainability/esg/environment/biodiversity/charity-smile/

事務局だより

赤い羽根共同募金 ～「地域から孤立をなくそう」ささえあいプロジェクト～

【募金期間】
1月1日～
2月28日

毎年助成をいただいているこのプロジェクトは期間中に、**専用の郵便振替用紙**で募金をしていただき、集まった募金に加算して社会福祉法人岡山県共同募金会から助成していただけるというものです。
今回のご寄付は、スタッフの子どもへの対応力の向上を目的とした研修会やボランティアスタッフ養成講座の開催、また子ども・若者が安心して相談できる体制を整えるために活用させていただきます。

※お振込みの期日を過ぎますとモモの寄付として扱われませんので、
くれぐれも期日内のお振込みをお願いいたします。

ぜひご協力をお願いいたします！

イオン「幸せの黄色いレシートキャンペーン」に参加しています！

毎月11日にイオンモール岡山に設置されている専用の投函BOXへ黄色いレシートを入れると、レシートの合計額の1%が子どもシェルターモモに寄付されるものです。
不定期ですがボランティアさんにも協力いただきながらイオンモール岡山の店頭に立ち、モモのことを知っていただく活動も行っています。

毎月11日にイオンモール岡山でお買い物の際は、ぜひ黄色いレシートの投函をお願いいたします！

Amazonほしい物リストでいただきました！

全国各地の方々から下記写真のように沢山のご寄付をいただいております。
日用品や食品、この期間はお米もたくさんいただき、各ホームやアフターケアの子どもたちのために有効活用をさせていただいております。

Amazon
ほしい物リストは
こちらから

ほしい物リストは定期的に更新しておりますので、引き続きご支援いただけますと幸いです。
ご寄付くださいました皆様、本当にありがとうございました！

さまざまな形でご寄付をいただいています！

企業や個人の皆様から、食材や日用品など、たくさんの温かいご寄付をいただいています。
野菜や果物、生活用品など、日々の活動を支えてくださるお気持ちに心から感謝いたします。
皆様のお力添えが、モモの活動を続ける大きな支えになっています。これからも無理のない範囲で、あたたかいご支援をよろしくお願いいたします。

●ご寄付は金額の多寡に関わりなく下記へご送金をよろしくお願いいたします。

郵便振替口座 01370-4-52835 特定非営利活動法人 子どもシェルターモモ
（ご送金の際はお名前・ご住所・寄付である旨をご記入いただけますと幸いです）

●クラウドファンディングによる寄付も受付中 →→→→→→→→→

ご寄付を頂いた方々（敬称略）2025年7-12月

■アライブ岡山　■一般社団法人若草プロジェクト　■岡山県立成徳学校後援会　■岡山北西ロータリークラブ
■株式会社ガスパル中国　■コストコホールセールジャパン株式会社　■特定非営利活動法人ジャパンハーベスト
■弁護士法人岡山香川架け橋法律事務所　■友次貴経　■奥谷珠美　他 匿名希望　15名

編集後記

アフターケア事業所enの通信でも触れられていましたが、「講演会・シンポジウム」に参加してきました。講師として登壇した社会的養護を受けた若者二人が、困難を乗り越え、希望をつかんでいく過程は、参加者にとっても「希望の力」となったのではないかと思います。また、シンポジウムでは「モモ」に関わる子どもも登壇し、自分の言葉でしっかりと話をしてくれました。これからも若者のやる気を応援していきたいと感じました。（文責：H･R）

この広報誌は㈱ベネシードの支援を受けて作成しています。